

バーナード・クリック著、関口正司監訳、大河原伸夫、岡崎晴輝、施光恒、竹島博之、大賀哲訳『シティズンシップ教育論：政治哲学と市民』

朝倉，拓郎
九州大学大学院法学研究院：協力研究員

<https://doi.org/10.15017/26470>

出版情報：政治研究. 59, pp.67-69, 2012-03-31. 九州大学法学部政治研究室
バージョン：
権利関係：

題だけでなく、政治家の持つべき資質やリーダーシップのあり方、有権者層との関係といった諸問題を有機的に結びつけ、最終的には、その思想家が持っている「あるべき政治社会の全体構想あるいは思想家の政治思想総体」（九頁）を問うことにつながっていくからである。そしてさらに、この有機的な問いのつながりは、我々自身の政治社会のあり方をめぐる省察へと読者を導くであろう。（朝倉拓郎）

バーナード・クリック著、関口正司監訳、大河原伸夫、岡崎晴輝、施光恒、竹島博之、大賀哲訳

『シティズンシップ教育論——政治哲学と市民——』

（法政大学出版局、二〇一二年、ix＋三二七頁）

Bernard Crick, *Essays on Citizenship*, Continuum, London, 2000.

本書の著者バーナード・クリック（一九二九—二〇〇八）は、イギリスの著名な政治学者であると同時に、労働党のブレア政権期において、シティズンシップ教育に関する諮問委員会の委員長として活躍したことで知られている。（この委員会の答申は、『一九九八年報告』（クリック・レポート）としてまとめられた。）このような彼の活動は、二〇〇二年に「シ

ティズンシップ」科目がイギリスにおける義務教育カリキュラムに導入されるという形で結実した。

本書は、政治教育、シティズンシップ教育に関してクリックが発表してきた新旧のエッセイを一冊にまとめたものである。本書のこのような性格上、各エッセイはそれぞれ独自の主題と文脈を持ちつつ、著者の一貫した主張が重複して登場する箇所も多い。以下では、本書に含まれる主要な内容を、大きく三つに分けて概観する。

第一の内容は、シティズンシップ教育が前提とする政治観と市民像に関する著者の主張である。著者が考える政治とは、「相異なる利益の創造的調停」（五八頁）であり、ここでの利益とは、物質的なものも精神的なものも含まれる。また市民とは、そのような活動を遂行するための政治リテラシーを身につけた能動的市民である。このような政治観、市民像は、著者の考える「政治的伝統」に根ざしたものであり、それは「自由な市民どうしの公開の議論で、紛争を解決し政策を決定する活動」（二七五頁、傍点原著）を意味している。著者によれば、このような政治的伝統は、世界にとって「最善の希望」であると同時に、我々の文明を破壊しかねない長期的問題が次々と蓄積している現在においては「最後の希望」でもある（二七六頁）。

第二の内容は、シテイズンシップ教育において教ええられる具体的内容に関する議論である。第四章「政治リテラシー」では、能動的市民が身につけるべき政治リテラシーの具体的な内容が検討されている。著者によれば、政治リテラシーとは「知識・技能・態度の複合体」（八九頁）であり、それぞれの具体的な内容が提示された後、最終的に樹形図の形で体系的にまとめられている（一〇二頁）。また、第五章「政治教育における基本的な概念」では、我々は様々な概念を通じて物事を認識するという「概念アプローチ」に基づいて、政治について議論するために必要な基礎的な諸概念が提示されている。さらに第九章「シテイズンシップ教育の諸前提」では、自由なシテイズンシップ教育の前提となる手続的価値（自由、寛容、公正、真実の尊重、理由を示す議論の尊重）の意義が強調されている。

第三の内容は、シテイズンシップ教育の教授方法に関する議論である。第二章「授業で政治を教える」では、政治の授業においては、従来の「憲法」教育のような議会手続や憲法制度に関する知識の伝授ではなく、現実の政治的争点から入るべきであると主張される。また、第三章「偏向について」では、政治教育における政治的偏向の問題が取り上げられている。著者は、政治教育において重要なのは一切の偏向を除

去することではなく、人間として避けられない偏向と極度の偏向という二種類の偏向を明確に区別することであると主張する。

著者が「序言」で述べているように、本書は、教科目としての「シテイズンシップ」を教える際の参考書、手引き書として編まれたものではないが、しかし、学校で政治を教えることに関わっている人間にとって、本書は理論的にも実践的にも具体的な示唆に富んだ著作となっている。とくに、能動的な市民の育成にとって必要な知識と技能を、学習可能な（＝教育可能な）ものとして具体的に提示している点は、とすれば、表面的な制度や法律に関する記憶学習か、あるいは抽象的な理論や理念に関する一方的な講義に終わってしまいがちな現在の政治教育に対して限界と焦燥を感じている多くの教員にとつて、大いに参考となるに違いない。

もちろん、著者の考える政治観や市民像は、それ自体論争の対象となりうるものであり、また日本の読者にとつては、イギリスと日本が置かれている状況や文脈の相違についても慎重な考察が必要であろう。しかし、現在の日本で頻繁に叫ばれている「政治的機能不全」が、たんに政治家や政治機構の機能不全にとどまらず、「市民の機能不全（あるいは不在）」にも起因しているとするならば、日本におけるシテイズン

シップ教育に関する具体的な議論や取り組みが、早急かつ活
発に展開されなければならない。その意味においても、この
時期にクリックのシテイズンシップ教育論が日本語で紹介さ
れたことの意義は大きいと言えよう。

(朝倉拓郎)